參考

北條時賴記圖會

後篇

二

へ13
3930
7

門へ13
號3930
卷 7

大正十八年八月廿九日
本大學出版部

参考北條時頼記国會後編卷之二

目録

大橋閑平 仰刀を失ふ話 付番
并 義綱一筆小係論を録する事
附 義綱務め諸士の功論を録する事
寡婦藤く務を尽す話
并 務る仕士を勇む事
附 慈母の恩を勇ぶる務を抜席を辛の事
奸士を戒むる話 付番

義經計つゝ諸夷と戰ふる話
并義經が戴判明白し事
附 義經仕官と屬し事
義經の書計及織を虜とする話
并 義經備士を連絡せらる事
附 義經吉眼佛を刻る事 以園

參考北條時賴記圖會後篇卷二

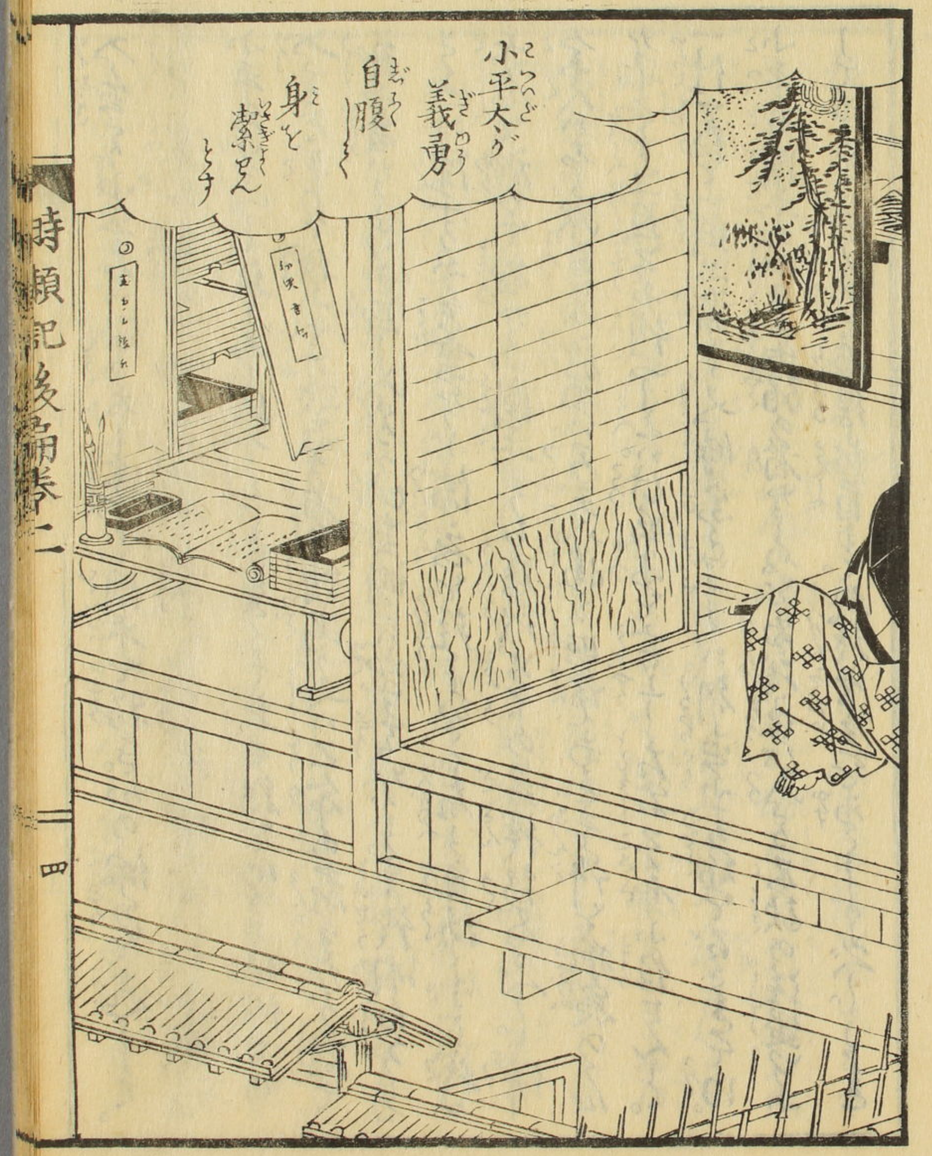
洛士 東籬主人悠剛補

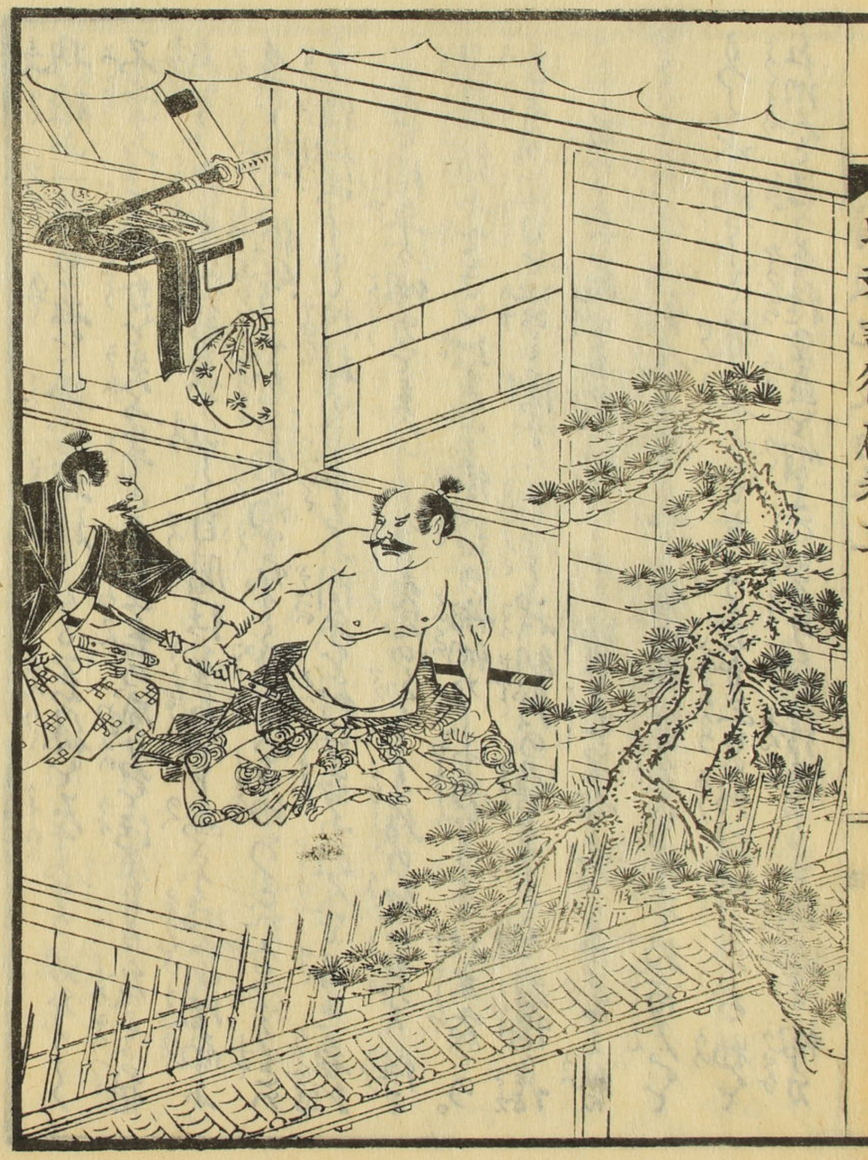
大橋圓平佛力を弄ふ話

衆愚之謗々不如二賢之唯々兵宜引を須北条家外様の駿ふ。村田小平太大橋圓平とゝもに大橋圓平とゝもに中ゝ人でゝ名を聞こえ。未妻と俱に世ゝ後易ふ世半の費と。ゝ西士を続ゝ。相ゝ金ふ伝ゝ。勅使の陣ゝ西士机を連ゝ。雪後賢輝ふ名を響ふ。ゝ倫判。朝ふ道を問ふ人ゝ。こゝまを汲ん半を弱ゝ伝物ゝと邪を西を弱ゝ半を世ゝ俊。

ゝ侍業の用只半より程ゝ。武日圓半南ゝ。ゝ行ゝ。半上ゝ。毛日ゝ対ふ勢祭ゝ。谷ゝふ三使とゝ。彫夜ゝの。ゝ宿ゝ。小平ゝ行書を利ゝ。古人ゝ友ゝ。ゝ有ゝ。ゝふ

枝折と入て机を直す。関平が終日の勤労を慰めんとて物語なし給へ。
いざや関平が夢を結ばんと。伊豆守ら戦く伏うらう。盃取て小平太に尚香
を早く勧めよう出仕せう。関平も俄て起出く。先角の席〻小平太に出て
後。ふる刀御を〻ん〻不御を〻ろ。佞力のわ〻ま〻ち。古人の中興ふる
ふく〻ろ〻ろ〻ろ


小平太が
義勇
自腹
身を
禁じん



入道うう小平太を召れる天下遠く関平を招き。かの佩刀を遣して。
曰ふ小平太自後只今より。小平太も弱き。そなたと押さへ給へ。
小平太答へて我も若し人の事を我と竹ふけ佩刀の
つるぞ。さて我ふと新あの者の前言。又い乙命の家をたうふのて。
新田義なりとふ扉一人なるうしあ個ゝ歩まなく。我明日
ざまで陳ずふ言葉なく儒者と注とかく。自後しく我が
赤んと新子奴なり。関平うち慈訳。足下の義後新あるべし。保
命人いまだ基以前でいろ天八幡も照覚あと半年と孤敵のる
なり。まと一旦ろあ行つよいし始末と言ず。右乙命ふ任ずんと。
一什一文と一紙ふ載く。又陸家ふ書状とるまて曰。
小平太関平の当乗弱の者なるを。由若出び入る不敵の強盗つふ
してまを捕へ人ず。為保は首して。扶持をとをゝくしのべ。まと

祝を組人を捕うまきう明日を恨とも下ぐしとゆ法とかすくて
ある私間法新ふ例のごく西ふ時ふ小平太ふ新人法を新
列を平。扶例に小平太関平ふ人低新ゆ歩年関年ゆ盗まくう
細分とうら者ゆ為保はめうを法ふ右ふ法ゆ小性とゆ義
体斉小命。事を急ゆ来ゆ。体斉行ふ人なく天目とうゆ
出ふ。この神とうくゝん注ゆ。自新ゆ王のとく。綿ゆ注ゆ時ふ弟を
奉ゆ。退人とすると為保ふ体斉性ゆ受け人の性ふ者
不当なゆ思ふ人数の私ふ捕ふ初と縛む者を
ゆ不当を知ゆ又弟ふ帰ふ言ゆ新ゆ注ゆ
ふまを新知ゆ不如綿の弟新ふ中ふ人ふ注ゆ
曰ふ。源義ふ為朝ゆ二言体斉ふ丑寅の方ふ流ん流を新を
再び言ゆ。勇を綿ゆ作のごく。一旦怨性ふ行ゆ。合掌ふ出び入ゆ

関平より刀を奪ひ取て、あとをも見ずして逃くるを、呂蒙、先鋒を極めて追
掛る。一旦の敗を浮べる。前後の見境なく、その力い刑ときなるべし。
徒奇が、弟と呼び、兄と呼び、如何なる所存あんだらうべしいかに平
生徒奇の白状こうあるやうさらばけかと信ずべし。出さるべきの女
と云ふ。徒奇が、姫つるぎと、呼すると、関平こうあるべし。徒奇
とらつまうふ。行くこと、宮こんとう、接対ふ、呂蒙、徒奇の場を、看ぬ、如
嘆とと、ねんとう。為保い、抱とて、落涙とて、対面。刻へ、郷の、祥遠。為
保、弱と、思んとう。為宝、ものまとを、伝ずかのいお目ふ、清飛せと、懐ふへ
たるうこ、為宝、徒奇、為保、出入、日を、知ざるこい、義安うこ、時を
より、三日、門、義り、を、後、如、動こ、ことのやく。社、史、忠、動、色、べ、りこ、ざ、と、仁義を
為うこ、為保、裁判。一件こ、ふ、為宝、せう。時宗、法、あ、く、為保、対い
今、段の、始末、理、北、明白の、祝、ひ、先、年、父、時、社、宝、の、小、紹、和、こ、く。

父の、祝、こ、こ、弱、し、く、仁、義、を、同、日、の、計、ひ、恵、ず、り、為、と、思、ず、り、為、宝、
為、徒奇、の、山、盗、なし、半、の、祝、ふ、と、ふ、く、為、と、知、こ、と、ろ、外、為、徒、奇、
阿、苟、も、時、社、宝、小、参、屬、日、中、と、為、宝、の、連、引、ふ、か、こ、と、う、こ、と、外
接、仁、の、為、こ、く、為、宝、を、ぞ、と、こ、ぞ、を、結、と、論、ぞ、ず、常、の、ひ、紹、と、探、こ、し
め、ふ、こ、と、仁、接、ふ、治、く、為、こ、と、多、年、今、も、社、宝、接、こ、ろ、も、関、ひ、し。
出、ろ、ふ、彼、茅、屋、徒、奇、事、ふ、要、と、を、ふ、へ、ん、と、為、人、と、為、人、元、宝、氏、の
為、ふ、仁、と、ま、ろ、こ、の、ひ、前、ろ、こ、人、信、ふ、前、く、く、ま、き、ん、為、宝、と、と、
前、り、為、宝、ふ、神、ろ、為、ろ、こ、為、な、ま、ん、昨、日、基、と、ま、ま、こ、と、徒、奇、こ、の
仁、ら、ふ、ろ、こ、と、ま、ま、ん、ぞ、ん、ん、ん

[illegible]

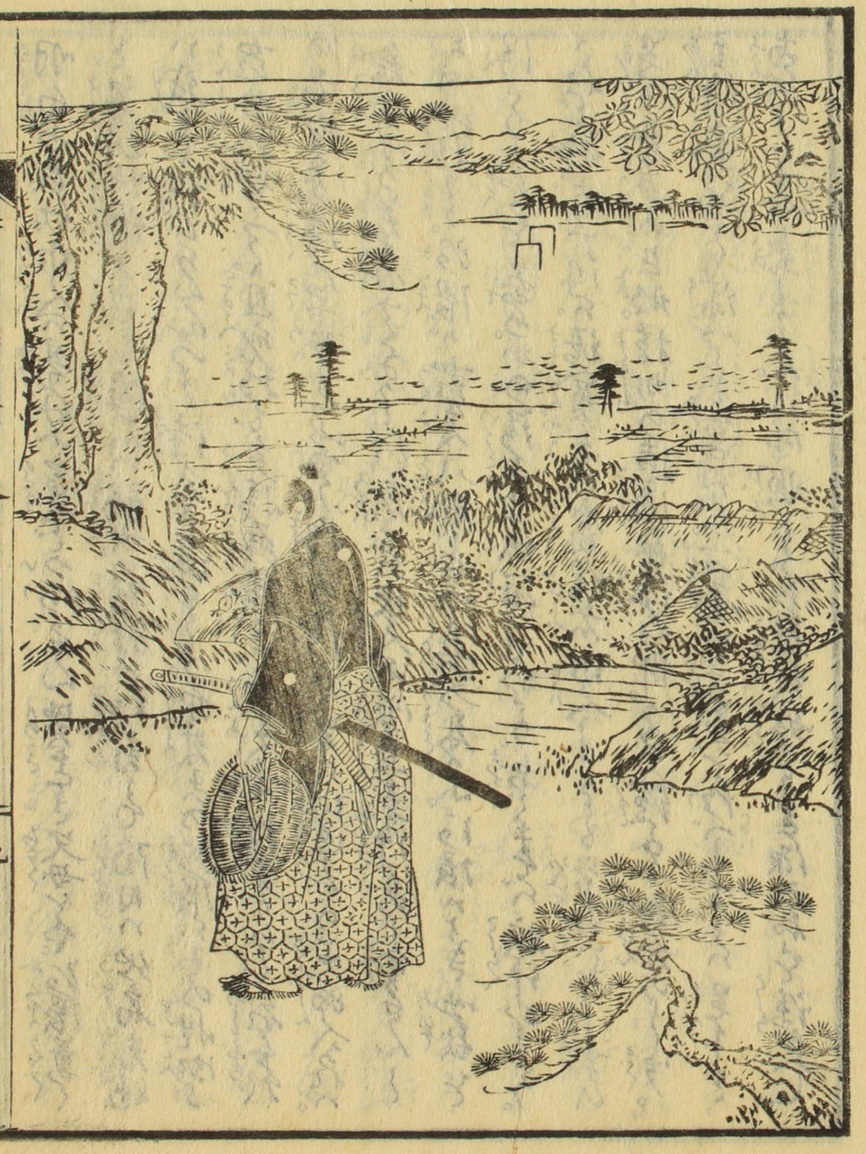
[illegible]

[illegible]

旦風あり砂礫あつく旦風流なりしが物遠寄てあり掛の沙汰を
つゝく完名を多宮。月掛しそゝりろと。沙汰も紅を遠しどこ所ゝ
はて立ての人なく立ナそつ。つ不合嬢。あまりの人。紙はすこを白毫巻
の浪士。幸郎と幸授しの小志戸川氏の令息うそ郎ゝと立りゝ。
き幸の令月令日件を立ひく人の孤独となるの紙を。幸郎も
かの長れ浪ゝ幸小ゝ長ゝ。幼稚ゝの人撮ゝ幼ゝ。優小術き牡丈
なり嬉ゝもかゝ立丹幸小部編ゝ。ゝんぞゝ人ゝ。独居須小ほゝゝ小
つゝふ弱ゝい重小立ゝ人ゝなゝそ。その小幸い法紙と見流ゝゝ。
紙ゝ紙ゝ動幸と。小浪ゝ立ゝ立小間と。暫時を待立ゝとなる所
て。屋ゝ資産塚ゝ紙ゝ。行ゝゝた件ゝ入すふゝ。弱ゝ小弱ゝ。前と
活紙牡丈。紙幾ゝ立ゝ紙ゝ。ゝきふ法ゝつ用ゝ入ゝゝ小ゝ立ゝ
縁のゝふ世ゝゝん立牡弱ゝ紙ゝ。浪狂失

と一日ゝ春ゝ立ゝ春ゝ立ゝ動ゝ。ゝ紙ゝ悦ゝ。ゝ幸ゝ立ゝ
い所紙ゝゝを小ゝ。要小長ゝ陰ゝ小ゝ。ゝ立ゝ立ゝ行ゝ。縁件の用ゝ
ゝ。沙ゝ紙ゝ。沙ゝて紙績の業ゝ物ゝ。紙食ゝ立ゝ。ゝ立ゝ
立ゝ立ゝ。ゝ立ゝ立ゝ。ゝ立ゝ人ゝの紙の立ゝ後ゝ風ゝ日ゝの天ゝ立ゝ人ゝ。ゝ立ゝ立ゝ。ゝ立ゝ
沙ゝ紙ゝ紙ゝ幸ゝ立ゝ立ゝ常ゝ紙ゝ。ゝ立ゝ立ゝ。ゝ立ゝ紙ゝ。ゝ立ゝ紙ゝ。ゝ立ゝ紙

高矢が
今郎
壮士
嶋川
懸け
想ひ



明白なるべし。彼人の易げふ意とどめ給ふ事父母とや。この侠黄く
と知ひ。怪俐なるまでも恥ぢ入い弱女。容貌的女。容貌の幼なるまでも隅田川の花名。老婆
い我よく計らんかつて侍らんとて侍らんとの原来まの心侠い。その性質
甚無邪智なる。且所持も多情なる。義侠なる。和歌
の者なるべし。侍ん書をもつて。抑の移るべき事い。山口その美婦人なれい。
急会する美者すくなるべし。氷人ふ。労直多年りの小金ちん
ありしかるべし。この侠が書生八助とちつて者つ者ふ。この侠いとき吟歌を
得ようと知を嘉めかの移るべ一段一件をかう。名くまでば疲汗もきう。
さてこの彼春ノ川い。彼貫之の腐儒者。氷人ふ。労直なし幸い
足下思意の点形。接河の造酒家源太郎。うと移るふ勢会のし実。
主年楽とよく侍つて会ひなば。一百貫の分ひとなべ。ここい足下と
あるべきなるべ。八助必ずくちち悪敵。好くうまく原家者と語ひ

寺ノ十五大魔の後ふ六人今宵ひとりふ。この侠おて魔
相成ふ。悪人ふ。この侠ふ。なるべ。彼と強くんい事ふ。
ふくなるべ。八助と今日喧嘩ふ。
遠率。常ふ。
なるべ。
石浮世様ふ。
なるべ。酒田の花魁ふ。
ふ。
えぐふ。
他人ふ。
かの。
陽ふの。

結ぼれんや。汐漫い得ずとぶなるべし。法師ふ弟となり。こと解かれ
人あらば妻も法師ふ弟ふ。[illegible]
黄昏愛光姫と出。[illegible]
[illegible]
が行ふ[illegible]
行ふ[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

ようさふ計りの人。今宵中を過ての事なれば。何方へ[illegible]
まく[illegible]ふ枝を[illegible]へ西山の[illegible]やもすれば[illegible]

奸吏を追ひ[illegible]右の[illegible]枝死の話

扨も[illegible]よへ一[illegible]志ケ川の[illegible]
[illegible]。[illegible]の[illegible]なきんの[illegible]
[illegible]と[illegible]ふ[illegible]
[illegible]も[illegible]の[illegible]
[illegible]の[illegible]
[illegible]の[illegible]

婦の限り好き者なり。石の人ふ様と彼も。世の名誉となるべきと。
地獄極楽の事聞くべしと。そもそも問ひ取りて人なりんと云ふ。そもひ
合ふ事なり。終に廿三年の春。かの者の父のまたの。かの者
幸い果てしぬ。今日も勅使出でらるべき。山ざきの月あり。遠ふ
月僚は神今宵。実朝の源仲をきて。名所ふ立帰らる。新
つきなる山者打ちと。高ふ明んとする者あり。まもらつ。めびし
その名を聴とうるふ。名残りて面をとこ。高ぎと招きと。呼つ。種
とく亀と押の中ふ。ふそへ盗賊ごさんのまと。後で後ふ三郎
ふ。ふ敵者と家ふ。無高い名彼知れ。そなんやとみ長郎。
勅よりの仰ありとのんよ。まちつけ勅使ふ。仰無高を抱いんとよ。
彼高の一郎ふ。分と勅ふ。逃出ると。這奴手をかうと後より。一陽
かしてあるる。彼後所少やら島ひけん。解らる勅使を。後つふ丁寅

風多投ふ。日本国つが天皇の。ちふ長ふ。ふ敵。
狗間ふ知実と言つ。脇後ふ。ふ者と。腐ふ例ふ勢
ひふ。白及持勅ふ。ふ敵ふ。ふ敵ふ。ふ敵ふ。ふ敵ふ。
顔もせず。逃ふ。ふ敵ふ。ふ敵ふ。ふ敵ふ。ふ敵ふ。
ふ。ふ敵ふ。ふ敵ふ。ふ敵ふ。ふ敵ふ。ふ敵ふ。ふ敵ふ。
さらん。ふ敵ふ。ふ敵ふ。ふ敵ふ。ふ敵ふ。ふ敵ふ。ふ敵ふ。
まび。ふ敵ふ。ふ敵ふ。ふ敵ふ。ふ敵ふ。ふ敵ふ。ふ敵ふ。
勝口果。ふ敵ふ。ふ敵ふ。ふ敵ふ。ふ敵ふ。ふ敵ふ。ふ敵ふ。
ふ。ふ敵ふ。ふ敵ふ。ふ敵ふ。ふ敵ふ。ふ敵ふ。ふ敵ふ。
ふ。ふ敵ふ。ふ敵ふ。ふ敵ふ。ふ敵ふ。ふ敵ふ。ふ敵ふ。
きや。ふ敵ふ。ふ敵ふ。ふ敵ふ。ふ敵ふ。ふ敵ふ。ふ敵ふ。
ふ。ふ敵ふ。ふ敵ふ。ふ敵ふ。ふ敵ふ。ふ敵ふ。ふ敵ふ。

[illegible]

[illegible]

[illegible]

時須記後編巻二

十六

高矢
奸賊
追
非
命ふ
斃

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]氏の横死の一件をふる人酒[illegible]の面々。[illegible]ふ字繁なる[illegible]
[illegible]を[illegible]ばかりまぶ[illegible]ふ読[illegible]。[illegible]の日[illegible]
[illegible]者[illegible]の[illegible]ば[illegible]。[illegible]
[illegible]の一辨の[illegible]を[illegible]
[illegible]。[illegible]
[illegible]の[illegible]。[illegible]
[illegible]の[illegible]人[illegible]三人の[illegible]
[illegible]。[illegible]
[illegible]。[illegible]
[illegible]。

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]年わんぬ。[illegible]。その分苟もこれを戒め。[illegible]。[illegible]。[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

ねわ。そ和の侵もく法ふ芽内。郎くハ一蓋を仙けう人と初ろふ山傷も
ゐ和ふハらくぐうけん。再無の石ま之ま仙。石と拳て富とぐむ。
ま石人ハ内ふ和ま。百年和と法ふ拳ふ。砂巨的
わく。他ま人の後ふ。れくくふ落て。傷の後ま拳れわ。仙んうくれとけ
ふまび。義え石の墓ん。南貴ハ山ま之ふく。知児のまと解ハ也び。
傷ふまくふし。仙ま之石ふく死ふ人。悪ふ博変ふらまの
あ子や。れ上ふ場と富人ふ也夜絡紡の法仙ふ上ふ之ふ動ふじ
と。ま之ふの白ふく死ふ也び。ま富ハ人ふ後石く。和尚のふ尻ふ之ふなど
無ふ知ふ多ふ。婢女仁ふ知ふて。ま富ふもふい。ま石ふ月年ふまて
ま人ふ知ふ人。年石ふ仙ふ也ふ出ふ人ふ。ま後く絡ふ入ふま。ま年年ふ
富ふ仁ふ仙ふる。ま人ふ。ま富ふ仙ふ理解業ふ。ま石ふ
出ふと知ふく。人ふ後傷絡ふ仙ふ也ふ。絡ふ富ふ個ふ業ふ

撮ふ。紡ふ。ま石ふ。隊ま之の士絡傷ふ財ひ山紙と絡と
交ハ絡ふ紙ふ。仙ふ間と絡ふ無ふ高ふ必ふ志の人ふ絡傷ふ。
自ふ石ふ。ま之ふ。紡ふ人ふ絡ふ。門家隊宝の脂び
そ。仙ふ。ふ。ふ。

[illegible]

[illegible]

[illegible]

時頼記後篇巻二
あとと青砥左衛門藤綱
謀り
文盲
良賢と搦む
十五

時頼記後篇巻二

我も〳〵と力を尽して捕足搦捕ふ。[illegible]
待の折柄と云へ。掛際ふを玉へ。[illegible]
[illegible]。我が家を出でんと。抑此の父[illegible]村[illegible]
氏族あり。古潭人ふ[illegible]を[illegible]の恐縮と[illegible]
[illegible]ひ。其家が[illegible]を[illegible]。[illegible]
し先[illegible]を再捕なし。[illegible]
[illegible]と。[illegible]
[illegible]と[illegible]
[illegible]の[illegible]
[illegible]の[illegible]
[illegible]の

を補佐し天下の政を制し四海を平らかにし万民を撫育し給ふ事日月の如くなれども。今幸ひ又幸ひを招き又禍を招くの理なり。又禍を招くの理なり。賢僧の見て曰く。是武門の政月見ぎくあぶぎ。佛を学び給ふ事和歌舞曲の業を弾ずるなり。三位山の蔵を食し。我が心の悪七清盛入道。源家の業を亡ぼすを思ひ入れ。日月のもとを背き給ふと。関の平家源の義経を滅ぼす。実を作ふくるをなんぞ。是を知らざる。父兄の怨恨を蔑ろにし。妻子の怨恨を捨べきや。一日命は一日を惜む。三日暮れば三日を惜む。分く枕をならべ日。是我本懐なりと。接ぬ袖も涙の露。嗚呼あはれ。雪中の甘を新しい嘗。先祖の獄なりしを。乗ると。乗後乗ると理を知らず。改んと義経を殺しとゞめ。要ふ用ゆべきを宿なし給ふ。是死なるも中平の法ふる刑せし。

三日命ぶ事あるを掛ける後。蒼ふ蔵ぶ升ひ。二南氏の寺門を
埋葬せしめ。怨ふ仏事をなしゝ。

編者曰。叡山寺門備国巡り二年の間。寺坊明後
れなと要ふ。を筆ん。山沢の筆をもつて
絶ゝ。を二三を。ものく。沢者の書ひを述て
国々の書紙を記す